

鑑賞の授業をつくる(1)

— “「日本美術」の位置” を確かなものにするために —

隅 敦・本波 葉子・谷川 瞳

Making the class of appreciation in Art Education (1)

To make establish “the Position of the Japanese Fine Arts”

Atsushi SUMI, Yoko HONNAMI, Hitomi TANIKAWA

E-mail: sumi@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：日本美術，美術鑑賞，学習指導要領

keywords：Japanese fine Arts, Appreciation, Course of Study

はじめに

筆者は、小学校に勤務していた当時の図画工作科の教科書¹⁾を元にして、日本美術の鑑賞の授業を行ったことがある。その授業は、ゴッホをはじめ、19世紀後半の多くのヨーロッパの画家たちが、当時のジャポニスムの潮流にのっとり、自作の表現に浮世絵をはじめとした「日本趣味」を取り入れていた事実を再確認させる内容であった。

本研究は、その際、「小学校の図画工作科の題材に取り上げられている「日本美術」の紹介の方法は、西洋美術が上位にあることが前提ということを示しているのではないかと、疑問を感じたことが出発点になっている。欧米の高名な画家たちが取り上げるほど「日本美術」は素晴らしかったというある意味欧米の美術文化の受容を促す内容の授業を行っていたことに違和感を感じたのである。

そこで、筆者は、「日本美術」の明治以降から、戦前までの美術教育の中における“位置”について、歴史的経緯を踏まえながら関係文献を中心に考察した²⁾。そこでは鑑賞を中心にした領域の中で、「今後の美術教育における“日本美術”の位置”の確保について」と、次の三つの提案を行った。

(1) 「日本美術」の美術教育上における再定義

(2) 「日本美術鑑賞資料」の作成の必要性

(3) 関係機関における「日本美術」の指導者育成

以上の提案において(3)については、本学部の後期の主として小学校教員の免許取得のための選択必修の授業科目「図画工作」で試みを始めてい

る³⁾。平成21年度、本大学で行った教員免許更新講習⁴⁾において、美術教育の評価と学力について考えさせるための実習を「日本美術」の鑑賞をベースに構成し行い、平成22年度の11年次教職員研修「富山大学の教員による研修講座」においても実施の予定である。

本論文では、その後の著者の論考を加えて、本年度の美術教育専修の大学院生と共にこの研究を進めていきたいと考えた。

まず、第1章で戦後の学習指導要領において、「日本美術」がどのように位置づけられてきたのかについて、整理していく。第2章では美術教育雑誌に掲載された「日本美術」を取りあげた小学校及び中学校の授業実践を整理し、その傾向をまとめる。第3章では、現職教員である筆者の一人が、中学校で過去に実施した「日本美術」の鑑賞の授業実践を振り返って、その記録を整理する。第4章では、前章までの内容から美術教育で取り上げる「日本美術」について、前回の論文に引き続き考察を行い、加えて鑑賞の授業をつくるために求められる条件を整備していきたい。

1 学習指導要領における「日本美術」の扱いについての変遷

本章では、小学校及び中学校学習指導要領における『日本美術』の扱いについての変遷を、戦後初の学習指導要領である昭和22年の試案から、次期学習指導要領である平成20年の学習指導要領⁵⁾

までたどっていく。

（１）昭和22年学習指導要領図画工作編（試案）

昭和22年の学習指導要領図画工作編（試案）は、戦後初の学習指導要領である。この指導要領では、第1学年から第6学年までを小学校図画工作、第7学年から第9学年を中学校美術と考えることとする。第3学年から「鑑賞」の単元が設けられている。それは「工芸品及び美術品の鑑賞」とされ、鑑賞の対象は日常使っている工芸品や学用品、絵画や彫刻などの実物または写真・複製品など、大変幅広い。また、第5学年では展覧会や価値の高い建築物などを、第6学年では展覧会や美術館、博物館、古社寺等を機会があるごとに見学することが求められている。特に、鑑賞の対象として「日本美術」を取り扱うことと特に明確には記されていないが、鑑賞材料の例として、茶わん、盆、竹細工などがあげられていることから、日本国内の美術作品や工芸品等を鑑賞の対象とすることが求められていることがうかがえる。

この学習指導要領では、第7学年においては、「日本美術」を扱うよう促す記述はみられない。しかし、第8学年及び第9学年において、その記述がみられる。特に、第8学年の「単元十 絵画・説明図における各種の表現法（二）指導法―生徒の活動 注意1」において、「源氏物語絵巻」「春日権現験記絵巻」等の「絵巻物」，「平家納経の装飾」，「わが国各時代の絵画」が研究の対象として挙げられている。また、第8学年、第9学年ともに「単元十一 鑑賞を主とした美術史」において、「日本及び世界各国の美術品」を鑑賞するよう記述がある。

（２）昭和26年学習指導要領（試案）

昭和26年の学習指導要領図画工作編改訂版も、昭和22年の学習指導要領と同様に試案という形で発布となった。小学校学習指導要領のまえがきにおいて、この学習指導要領を参考としながらそれぞれの指導者が「創意しくふうをこらすことがたいせつである」とし、指導内容においても「これは示唆であって、このとおりにすべきだという意味ではない」としている。また、学習指導要領を児童の興味・能力・必要に応じて創造的に用いるよう促す記述やそれぞれの学校が地域の事情に応じて図画工作教育の目標を作ることを促す記述は、昭和22年の学習指導要領にはないものであり、各学校・指導者側に対して地域や児童に応じて柔軟に対応することを求

めているといえる。

「日本美術」に関連した点を見ると、「小学校における図画工作教育の目標」の中に「(e) 家・地方・日本・および外国の、文化的資産としての美術品に対するいくつかの知識を養う。」が設けられている。ここでは、「日本」を楽しむというよりは、「文化的資産」としての文化的価値や経済的価値について学ぶ意味合いが強い。

この学習指導要領では、第1学年から第6学年までのすべての学年において「鑑賞」の領域が設けられ、その中に「日本美術」に関連することが記されている。第3・4学年の指導内容において、「自分の郷土にどんな美術品や工芸品があるかについて調べたり、話し合ったりする」とあり、また、第5・6学年の指導内容においては、「国にどんな美術品があるか、それを保存するためにどんな施設があるかについて調べたり、話し合ったりする」とある。ただし、「鑑賞の注」に「これらの事は、小学校においては多少の関心を持たせる程度でよいので、あまり進んだ扱いはしなくてよいであろう」と記されており、小学校の段階では積極的に「日本美術」を取り扱うよう求めているわけではないようである。

中学校学習指導要領においては、「1 図画工作指導内容の範囲」に「3」鑑賞活動（5）わが国の過去の美術作品を研究し鑑賞して、いろいろな時代の文化を理解する活動」として「日本美術」を扱うよう記されている。この学習指導要領には、美術品の鑑賞資料として「文部省編鑑賞資料」の目次⁶⁾が示されている。全64作品のうち、「日本美術」が42作品挙げられていることから、「日本美術」の鑑賞を重視していたことがうかがえる。なお、この「文部省編鑑賞資料」の目次が記されたのは、この昭和26年の学習指導要領のみであり、これが文部省および後の文部科学省の示した、唯一の鑑賞作品であるといえる。

（３）昭和33年学習指導要領

昭和33年の学習指導要領図画工作編の改訂にあたって、その考え方が5つ示された。その中の1つ目は、表現活動を重んじ、「表現の技能、創造的な力、実践的な態度を培うよう指導の充実」することであった。2つ目には「学習内容における美術的な面と技術的な面における統一、調和ということを図り、科学技術或は生産技術といったものの振興、中学校美術或は今般新設された中学校技術・家庭科

との関連も考慮し、工作教育の改善充実」することであった。表現する能力を高めること、また高度経済成長期という社会背景により、技術面の向上を図ることが強調されている。一方、鑑賞についての記載は全くなく、したがって「日本美術」そのものについての記述も一切ない。

昭和33年の小学校図画工作科学習指導要領では、第5・6学年の「2 内容(3) 版画を作る」において、「エ わが国の伝統的な版画や、近代版画の特色について、いくらか理解させる」とある他は、鑑賞の対象として「日本美術」を取り上げることを明記した記述はない。

昭和33年に改訂された教育課程は、その「根底を流れる基本的な考え方」を「独立国家の国民としての正しい自覚をもち、個性豊かな文化を創造し、真に民主的な国家社会の建設に努め、国際社会において信頼され、尊敬されるような日本人の育成をめざしたもの」とした⁷⁾。当時の初等教育課長上野芳太郎は、「最近の世界における文化・科学・産業など急速な発展に即応し、わが国の文化・科学・産業などの飛躍的な発展を図り速やかに世界の水準まで達せしめなければならない」こと、「産業もオートメーション化によって第2次産業革命が現に進行中」であり「このような現代に処し、わが国の科学、産業などを世界水準にまで高め、さらにそれを超えて進展させるためには、義務教育からの画期的な充実を図り、国民の教育水準を一般と高めなければならない」こと、これら2つの理由から「義務教育における教育課程の改善が要請された」と言う⁸⁾。また、「義務教育からの画期的な充実を図り、国民の教育水準を一般と高め」ることは「貿易を伸張し、国民生活を充実・発展させるためにも極めて大切」であるとした⁹⁾。つまり、「第2次産業革命が現に進行中」であり「科学、産業などを世界水準にまで高め、さらにそれを超えて進展させるため」の教育が求められていた社会背景¹⁰⁾から、図画工作科においては技術の向上が強調され、日本の伝統や文化といった「日本美術」に関することは、隅に追いやられたのである。

昭和33年の中学校学習指導要領においては、教科名が「美術」とされる。「第1 目標」において「3 わが国および諸外国のすぐれた美術作品を鑑賞させ、自然に親しませて、美術や自然美を愛好する心情や鑑賞する力を養う」と示された。

第1学年においては、その「目標」に「(4) わが国および諸外国の絵画や彫刻などのすぐれた作品に親しませ、(以下略)」とあるが、内容等に「日本美術」を扱うよう促す記述はみられない。

第2学年の「目標」においては、「(5) わが国および東洋諸国の絵画、彫刻、建築、工芸などの伝統的な作品のよさや美しさを楽しむ鑑賞力を養うとともに、美術文化に対する興味や関心をもたせる」と示されるほか、「指導上の注意事項」として、「『B鑑賞』の指導にあたっては、わが国の絵画、彫刻、建築、工芸などの作品のすぐれたものの中で、生徒に親しみやすいものを選び、じゅうぶん味わわせるように指導する。東洋諸国の美術については、わが国の美術と深い関係のあるものを選んで扱う」と記され、「わが国」が強調された形となっている。

第3学年においては「日本美術」を扱うよう促す記述はみられないが、「B鑑賞」において「(2) 郷土の美術作品の鑑賞」と記され、「指導上の注意事項」において「郷土に適当な美術作品があれば、適宜これを取り入れて指導することが望ましい」と第2学年よりも控えた記述にとどまっている。

(4) 昭和43年学習指導要領

昭和43年に改訂された小学校図画工作科学習指導要領では、第5学年の「2 内容 E 鑑賞(3) 代表的な美術作品を鑑賞させて、そのよさを味わう力や文化財を尊重する態度を養う」の「3 内容の取り扱い」において、「(5) 内容のEの(3)の美術作品は、たとえば墨絵、絵巻物、版画、彫刻、工芸建築、など」として「日本美術」を扱うように取り上げている。しかし、第6学年では、「(5) 内容のEの(3)の美術作品は、たとえば絵画においては写実的なもの、構想的なもの、幻想的なものなどというように、作品の傾向を考えて示したり、表現の形式を考えて示したりすることが必要である」となり、その記述はなくなる。この改訂では、前回の33年に改訂された図画工作科学習指導要領にはなかった「文化財を尊重する態度を養う」と示されている。第5学年で扱うよう示された墨絵、絵巻物といった「日本美術」も、「日本の美術品」というよりは、「文化財」という扱いで取り上げるように読み取れる。

「日本美術」が「文化財」という扱いで取り上げられている、昭和43年の学習指導要領に影響を与えた昭和42年10月30日に発表された「小学校の教

育課程の改善について（答申）」¹¹⁾を見ていく。この答申では、小学校の教育課程改善の基本方針として「小学校教育のねらい」の中で、4つの項目を「とくに強調する必要がある」として挙げている。特に、図画工作科に関係しているのは「(3) 正しい判断力や創造性、豊かな情操や強い意志の素地を養うこと」であるが、図画工作科の学習指導要領において「文化財」が取り上げられている点から「(1) 日常生活に必要な基本的な知識や技能を習得させ、自然、社会および文化についての基礎的理解に導くこと」にも注目したい。図画工作科において「文化についての基礎的理解」を図るため、「鑑賞」の領域で「文化財」としての「日本美術」が扱われることとなった。

（５）昭和44年学習指導要領

この昭和44年の中学校美術科学習指導要領では、第1学年において「日本美術」を扱うよう促す記述はみられない。

第2学年および第3学年においては、「E 鑑賞(2) 美術文化への関心を高める」に「日本美術」を扱うよう記されており、鑑賞指導の対象となる作品として「わが国および諸外国のすぐれた絵画、彫刻、工芸、建築などの作品から、両学年を通して計画的に選ぶこと」とも記されている。

（６）昭和52年学習指導要領

昭和52年の図画工作科学習指導要領においては、目標、内容ともに「日本美術」に関するはっきりとした記述は見られなくなった。

昭和52年の改訂に影響を与えた、昭和51年12月18日に発表された「小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について（答申）」¹²⁾の「⑥図画工作科、美術、芸術（美術、工芸）」に注目すると、「改善の基本方針」は「創造的な表現製作の喜びを一層深く味わわせることに重点を置くこと」とある。前回の学習指導要領で「日本美術」を扱うよう記されていた「鑑賞」の領域については、「改善の具体的事項」において「(ウ)『鑑賞』の領域の内容は、『表現』の指導との関連を一層密接に取り扱うことに留意し、現行の『鑑賞』の領域の内容を整理して構成する。内容の構成に当たっては、現行の内容のうち取扱いの程度が高くなりがちなもの、鑑賞対象の範囲が広がりすぎるものなど、例えば『身近な造形品』や『代表的な美術作品』の内容は、その範囲と程度を明確にする」とした。昭和43年

改訂の指導要領では、義務教育9年間の全課程を見通すこと、とりわけ高学年における指導は「中学校の美術科との関連を考えながら」行うことが求められたため、「鑑賞」の領域ではその対象作品が広がりすぎたり高度化したりし、そのことが問題視¹³⁾されたのである。

これを受けて改訂された学習指導要領の第5学年「2 内容 B 鑑賞」を見ると、「(1) 自然や造形作品を鑑賞し、それらに親しみをもつようにする。」とあり、鑑賞の対象は「友人の作品」や「自然や表現しようとすることに関連した造形作品」とされた。第6学年についても同様である。

中学校学習指導要領においては、「わが国の美術作品」および「日本美術」を扱うよう促す記述はみられない。しかし、第3学年の「B 鑑賞」に「時代、民族、風土などの相違による美術の良さや美しさを味わい、美術が国際理解や親善に果たす役割についても理解すること」と記され、「日本美術」を扱うよう示唆しているとも受け取れる。

（７）平成元年学習指導要領

平成元年の図画工作科学習指導要領では、再び「日本美術」を扱うことが示されることとなった。第5学年の「鑑賞」の領域においては、「ア わが国の親しみのある美術作品などのよさや美しさなどに関心をもって鑑賞すること」、第6学年の「鑑賞」の領域においては、「わが国及び諸外国の親しみのある美術作品などのよさや美しさなどに関心をもって鑑賞すること」とある。また、前回昭和52年改訂では、「表現製作」が重視され、「鑑賞」の領域も『表現』の指導との関連を一層密接に取り扱うこと」とされていたが、この改訂では「第5学年及び第6学年においては、指導の効果を高めるため必要がある場合には、鑑賞の指導を独立して行うようにすること」とされ、「わが国」もしくは「わが国及び諸外国」の「親しみのある美術作品」を鑑賞の対象とした、第5学年及び第6学年において「鑑賞」の指導を重視する記述がみられるようになった。これは、前回の改訂で「鑑賞」の指導が「表現」に付随して行うよう示され、また実際の指導において、表現の発想や技法などのヒントになることに重点が置かれた表現の指導の参考作品を児童に見せ、鑑賞の視点が絞られる形で扱われ、児童が作品を思いのままに味わうことができにくくなっていったためである¹⁴⁾。また、「わが国」もしくは「わ

が国及び諸外国」の「親しみのある美術作品」とされているが、「この美術作品とは必ずしも歴史的な作品に限るものではない」と示されており、昭和43年の改訂の際のように「文化財」として「日本美術」を扱うのではなく、「何ものにもとらわれることなく、思いのままに作品などに向かいそのよさや美しさを味わう」¹⁵⁾ ことに重点を置いていることも改訂のポイントといえる。

中学校においては、「第2各学年の目標及び内容」において、1学年の「B鑑賞」で、「ウ 日本の文化遺産としてのデザインや工芸に関心をもち、その表現の特色などについて理解すること」2学年及び3学年の「B鑑賞」で、「絵画や彫刻の鑑賞を通して」「イ 日本及び世界の文化遺産としての絵画や彫刻などに関心を深め、それらを尊重すること」とある。

この学習指導要領では、小学校においても、中学校においても再び「日本美術」を扱うよう記され、すべての学年の「B鑑賞」において、その記述がみられるようになった。しかし、この学習指導要領において「日本美術」は、美術作品というよりは「文化遺産」としての扱いが強調されているといえる。

(8) 平成10年学習指導要領

平成10年の学習指導要領は、平成元年を受け継いだ形となり、ほとんど変化はみられない。

平成10年6月の中央教育審議会答申『「新しい時代を拓く心を育てるために」一次世代を育てる心を失う危機—』において、日本の「文化」や「伝統」が強調されている。この答申は第一章を『「生きる力」を身に付け、新しい時代を切り拓く積極的な心を育てよう』としており、その中には「我が国の先人の努力、伝統や文化を誇りとしながら、これからの新しい時代を積極的に切り拓いていく日本人を育てていかなければならない」と記されている。そのうえ、第四章には「(2) 小学校以降の学校教育を見直そう 我が国の文化と伝統の価値について理解を深め、未来を拓く心を育てよう」¹⁶⁾ とあり、日本及び地域の伝統や文化を大切に、それらを発展させようとする態度を育成しようという方針が設けられた。このような日本の文化や伝統を尊重しようという気運は、平成元年学習指導要領の方針と変わらない。

中学校学習指導要領においては、各学年の「B鑑賞」において、「日本美術」を扱うよう記されている。また「第3 指導計画の作成と内容の取り扱い」

において、表現の材料や方法などについても「地域の身近なものや伝統的なものも取り上げるようにすること」とされた。特に、第2学年及び第3学年では、「A表現」において「日本及び諸外国の作品の独特な表現形式や構成、技法などに関心をもち、自分の表現意図に合う新たな表現方法を研究するなどして創造的に表現すること」とされ、「日本美術」を「A表現」の中でも扱うよう促している。さらに、「B鑑賞」においては、「日本の美術の概括的な変遷や作品の特質を調べたり、それらの作品を鑑賞したりして、日本の美術や文化と伝統に対する理解と愛情を深め、美術文化の継承と創造への関心を高めること」また、「日本及び諸外国の美術の文化遺産を鑑賞し、表現の相違と共通性に気づき、それぞれのよさや美しさ、創造力の豊かさなどを味わい、文化遺産を尊重するとともに、美術を通じた国際理解を深めること」とされた。

(9) 平成20年学習指導要領

従来から規定されていた個人の価値の尊重、正義と責任、男女の平等等に加えて、新たに、公共の精神、生命や自然を尊重する態度に関する目標が設けられ、そして5つ目には、伝統や文化に関する目標が定められた。このように、改正教育基本法では、前文及び目標において伝統や文化に関することが記されているのである。

次に、平成20年1月に発表された中央教育審議会による答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」を見ていく。この答申では、図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）の改善の基本方針が示され、それは以下の図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）における課題を踏まえて設けられたものである。

この課題の5つ目に対応するように、改善の基本方針の中に「美術文化の継承と創造への関心を高めるために、作品などの美しさを主体的に味わう活動や、我が国の美術や文化に関する指導を一層充実する」と設けられた。また、改善の具体的事項として「(エ) 暮らしの中の造形や我が国や諸外国の親しみのある表現などに関する学習では、作品などのよさや美しさを主体的に味わったり感じたりすることを重視する」とも記された。

同答申「7. 教育内容に関する主な改善事項」において、「今回の改訂で充実すべき重要事項」の2

つ目として「伝統や文化に関する教育の充実」が挙げられている。「グローバル化の中で、自分とは異なる文化や歴史に立脚する人々との共存のため、自らの国や地域の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けることが重要になっている」とし、「教育基本法第2条（教育の目標）等においても重視されている」とその重要性を強調している。そして、この改善事項の「(3) 伝統や文化に関する教育の充実」では、「国際社会で活躍する日本人の育成」を掲げ、自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、それを尊重する態度を身に付けることによって「グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存することができる」として、「わが国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実することが必要である」と述べている。さらに「芸術文化に親しみ、自ら表現、創作したり、鑑賞したりすることが、伝統や文化の継承・発展に重要であることは言うまでもない」と述べ、図画工作科においては「わが国の美術文化などについての指導を充実し、これらの継承と創造への関心を高めることが重要である」とした。

このように、平成20年改訂の学習指導要領に影響を与えた中央教育審議会による答申では、「伝統や文化に関する教育の充実」が示されているのである。

ところが、改正された教育基本法第2条や中央教育審議会の答申では伝統や文化に関する教育の充実が求められているものの、その扱いは小学校学習指導要領図画工作編においては、平成10年改訂のものほとんど変化はみられない。

中学校学習指導要領では、「2 内容 B 鑑賞」の第1学年において「イ 身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化に関する関心を高めること」第2学年及び第3学年において「ウ 日本の美術の概括的な変遷や作品の特質を調べたり、それらの作品を鑑賞したりして、日本の美術や伝統と文化に対する理解と愛情を深めるとともに、（中略）美術を通した国際理解を深め、美術文化の継承と創造への関心を高めること」と設けられた。これらは、今回の改訂で新たに加わった「美術文化についての理解」を深めることの内容が意識された記述であるといえる。現代の美術や文化をとらえる上で、古く

から受け継がれてきたものを鑑賞し、その国や時代に生きた人々の美意識や創造的な精神などを感じ取ることが必要であり、それにより、「文化の継承と創造の重要性の理解」だけでなく、「美術を通した国際理解」にもつながるとしている。

学習指導要領解説においては美術科が「文化に関する学習において中核をなす教科の一つ」と位置づけている。

2 「日本美術」を取り上げた実践事例の整理と分析

（1）「日本美術」を取りあげた実践を検証する意義

本章では、美術教育専門雑誌2誌¹⁷⁾に注目し小学校、中学校で「日本美術」を取り上げた実践事例について分析した。特に平成10年度版学習指導要領が発表された翌年の平成11年度から20年度までの10年間分の実践を取り上げることにより、この学習指導要領に記された内容に基づいているということになり、その影響を推し量ることができると考えた。

分析の方法は、「授業における鑑賞対象」「作者名」「年代」「所在地」及び「鑑賞対象が取り上げられた実践事例数」という項目で一覧表に整理する方法をとった。その結果、関連する授業の実践事例は57例（一つの題材で複数の作品を使用する例もあり）掲載されており、取り上げられた「日本美術」の対象作品数は32であった。

（2）日本美術を取りあげた過去実践事例の一覧

以上のように一覧にまとめると、実践を行った教師が使用した「日本美術」の対象の作品名が特定できた実践が、計63例あった。この事実は、同じ平成10年版学習指導要領に基づくそれぞれの実践が、授業者である教師に任されているかという点を示している。

さらに作品が制作された時代も、平安時代のものから江戸時代のものまでに限定されており、とくに明治時代以降の作品が挙げられていないことが特徴的である。

そのほかにも作品名が特定できない伝統工芸に関わる作品も計25件あった。これは、学習指導要領でこうした内容についても言及していることから、授業者が鑑賞の授業において地域に伝わる工芸品等を自由に取りあげていると考えられる。

鑑賞の授業をつくる(1)

No.	対象の題材・作品	作 者	年 代	所 在	事例数
1	「風神雷神図屏風」	俵屋宗達	江戸時代	建仁寺（京都国立博物館）	9
2	「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」	葛飾北斎	江戸時代		8
3	「鳥獣人物戯画（鳥獣戯画）」		平安時代	高山寺 （甲・丙巻 東京国立博物館 乙・丁巻 京都国立博物館）	4
4	「富嶽三十六景 凱風快晴」	葛飾北斎	江戸時代		3
5	「紅白梅図」	尾形光琳	江戸時代	MOA 美術館	3
6	「四季山水図」	雪舟	室町時代	東京国立博物館	3
7	「北斎漫画」	葛飾北斎	江戸時代		3
8	「略画早指南」	葛飾北斎	江戸時代		2
9	「富嶽三十六景 尾州不二見原」	葛飾北斎	江戸時代		2
10	「伴大納言絵詞」	常盤光長	平安時代	出光美術館	2
11	「富嶽三十六景 新柳橋の白雨」	葛飾北斎	江戸時代		1
12	「富嶽三十六景 甲州三島越」	葛飾北斎	江戸時代		1
13	「富嶽三十六景 寄する浪引く浪」	葛飾北斎	江戸時代		1
14	「秋冬山水図」	雪舟	室町時代	東京国立博物館	1
15	「破墨山水図」	雪舟	室町時代	東京国立博物館	1
16	「天橋立図」	雪舟	室町時代	京都国立博物館	1
17	「慧可断臂図」	雪舟	室町時代	齐年寺（京都国立博物館）	1
18	「燕子花図」	尾形光琳	江戸時代	東京都 根津美術館	1
19	「源氏物語絵巻」	伝隆能	平安時代	名古屋市 徳川美術館	1
20	「枯木鳴鶴図」	宮本武蔵	江戸時代	和泉市久保惣記念館	1
21	「瓢鮎図」	如拙	室町時代	退蔵院（京都国立博物館）	1
22	「松林図屏風」	長谷川等伯	桃山時代	東京国立博物館	1
23	「北野天神縁起絵巻物」	未詳	鎌倉時代	京都北野天満宮	1
24	「五位鸞図」	単庵智伝	16世紀初め	東京国立博物館	1
25	「石山寺縁起絵巻」	未詳	鎌倉時代	石山寺	1
26	「二世大谷鬼次の奴江戸兵衛」	東洲斎写楽	江戸時代		1
27	「東海道五十三次 蒲原」	歌川広重	江戸時代		1
28	「見返り美人画」	菱川師宣	江戸時代	東京国立博物館	1
29	「源頼朝像」	未詳（藤原隆信）	鎌倉時代	神護寺	1
30	金剛力士像	運慶・快慶	鎌倉時代	東大寺	1
31	竜燈鬼	康弁	鎌倉時代	興福寺	1
*	地域伝統工芸				4
*	日本の伝統色				4
*	仏像				4
*	伝統模様				3
*	生け花（花器）				2
*	和菓子				2
*	貝合わせ				1
*	珨				1
*	伝統色の宝箱（教材）				1
*	かさねの色目（装束）				1
*	包みの文化				1
*	日本庭園				1

（３）実践事例に多く取り上げられた作品の特徴

実践事例に多く取り上げられる作者は、俵屋宗達、葛飾北斎、雪舟であるが、作品は「風神雷神図屏風」「富嶽三十六景神奈川沖浪裏」「鳥獣人物戯画」であることがわかる。これら３つの作品から、実践事例に多く取り上げられる作品の特徴について整理したところ、共通の特徴が４点クローズアップされたので、次に挙げていくことにする。

①実物により近い鑑賞方法が可能な作品であること

１つ目の特徴は、教科書等に掲載されたものを鑑賞するだけでなく、レプリカを用いることで、より実物に近い鑑賞ができることである。「風神雷神図屏風」は、その作品の形態が二曲一双の屏風である。屏風は本来、立てて鑑賞するものである。教科書等に掲載されているものを平面のまま鑑賞するのと、屏風に仕立て鑑賞するのでは、鑑賞者が受ける印象は違う。この作品を取り上げた実践事例においても、多くの授業者は実物大の屏風を作成し、それを教材として使用している。一方、「鳥獣人物戯画」は絵巻である。絵巻は、連続した絵を広げ巻き取りながら鑑賞することで、場面の展開（時間表現）とストーリーを追うことができる。この作品もまた、教科書等に掲載されているものをそのまま鑑賞するのと絵巻の形態で鑑賞するのでは、鑑賞者が受ける印象は違う。この作品を取り上げた実践事例においても、授業者は絵巻のレプリカを教材として用いている。これら２つの作品は、絵画のようにまったくの平面の作品を鑑賞するのではなく、屏風を実際に立てたときの見え方を体感したり、実際に作品を手にとったりして鑑賞することができる。その結果、児童生徒の興味や関心を一層引き出すことが可能であると考えられる。

②現代の視覚表現との比較が容易で親近感をいだかせるものであること

２つ目の特徴は、現代の視覚表現との比較が容易にでき、親しみを感じることができることである。「鳥獣人物戯画」は、現代の漫画やアニメーションの祖だといわれており、現代におけるそれらの表現との比較が容易である。このことから、実践事例においては、「鳥獣人物戯画」を動画で表したり、吹き出しを加え、描かれている擬人化された動物に台詞を言わせて自分なりのストーリーをつくったりするものが見られた。

漫画やアニメーションといった現代におけるそれ

らの表現や、児童生徒が、自身に身近なものと作品とを比較することができる。そのため、鑑賞対象への興味や関心を高めるのにふさわしいといえる。

③デフォルメされたダイナミックな作風であること

３つ目の特徴は、デフォルメが施され、ダイナミックな作品であることである。「風神雷神図屏風」は、金地の屏風に風神・雷神が左右それぞれに配置されている。その様子は、力強く、生き生きとしており、躍動感にあふれている。また、背景が描かれていないため、風神・雷神が置かれている状況を想像し、自分なりに設定することができる。実践事例には、風神・雷神を切り抜き、自分なら画面のどの位置に風神と雷神を配置するか、切り抜いた風神と雷神を配置し直す授業が見られた。「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」は大胆でなおかつ緻密に計算された構図で描かれ、迫力や遠近感が感じられる作品である。実践事例においては、その迫力や遠近感を活かして、劇の舞台を制作し実際に劇を行う授業が見られた。このように、デフォルメが施されダイナミックな作風により、鑑賞者が自分なりのストーリーやイメージを作り上げることができる作品であることが、３つ目の特徴である。

④鑑賞対象の広がり期待できるものであること

４つ目の特徴は、時間的・空間的に広がりを持たせることができ、鑑賞対象を拡張させることができることである。「風神雷神図屏風」の風神・雷神の姿は、「北野天神縁起絵」に由来しており、また、この俵屋宗達による「風神雷神図屏風」は尾形光琳や酒井抱一によって模作されており、それらの作品と関連付けて鑑賞することができる。実践事例においては、風神・雷神が鬼の姿をしていることから、鬼をテーマとした「金剛力士像」や「竜燈鬼」などを関連作品として鑑賞している授業が見られた。「富嶽三十六景」や「北斎漫画」といった葛飾北斎の作品は、海外でも人気を集め、多大な影響を与えた。西洋のジャポニスムなど、今後の美術教育への起点として広がりを持たせやすい題材であるといえる。

この２つの作品から、鑑賞が１つの作品に留まることなく、その作品に関連付けながら違う時代の作品や諸外国の作品へと鑑賞の対象を時間的・空間的に広がりを持たせられることが４つ目の特徴であると考えられる。

3 「日本美術」を取り上げた授業実践の分析から

(1) 本授業実践に注目した理由

本章では、筆者が以前勤務していた中学校の美術科で行った鑑賞の授業実践を取りあげその課題について整理する。

過去実践を以下に掲載した理由は、まず、第1章で取りあげた平成10年学習指導要領の中学校美術の内容を踏まえた実践であること。筆者は、特に「B鑑賞」における、「日本の美術や文化と伝統に対する理解と愛情を深め」ることに注目し、また、「日本及び諸外国の美術の文化遺産を鑑賞し、表現の相違と共通性に気付く」と記述された点を意識して授業化を図ったこと。

さらに、本授業実践において、筆者が用いた作品は、第2章における分析で、事例回数こそ1回であるが江戸時代の著名な浮世絵作家である歌川広重のものである。

(2) 題材名「日本の美をさぐる～浮世絵～」中学2年、題材設定にあたって

本授業は、平成16年度に実施したものである¹⁸⁾。浮世絵は、中学校の第2年の生徒にとって、国語の教科書¹⁹⁾に「江戸の人々と浮世絵」という単元が掲載されていたり、社会科の歴史の時間に学んだりすることから、身近な題材であると考えた。

「名所江戸百景」は、歌川広重の最晩年を代表する江戸名所絵のシリーズである。ゴッホが模写したことで有名な「亀戸梅屋舗」や「大はしあたけの夕立」など、本シリーズの有名作は、日本美術史の概説書に取り上げられる機会も多く、高度な摺刷技法の駆使と化学顔料・染料の鮮烈な色感、そして何より人目を驚かす奇抜な構図など、幕末風景画の一特質を示す代表作である²⁰⁾。

現在の東京は、見る影もないが、この「名所江戸百景」によって当時の様子を知ることができる。当時の江戸の町を広重が考え抜いて制作した作品を見て、匂いや音まで感じることができるのか。制作後150年以上たった「名所江戸百景」が、現在の中学生にどこまで共感するのか。この題材では、中学2年生の目にどのように受け入れられるのか見てみたいと思っていた。

(3) 指導目標

「美術への関心・意欲・態度」

浮世絵の歴史的背景や印象派に与えた影響に興味・

関心をもち、「日本美術」の魅力を探ることができるようにする。

「鑑賞の能力」

浮世絵作品の多様性や表現方法を理解し、作者の心情や表現意図と創造的なよさや美しさを味わうことができるようにする。

(4) 指導計画

第一次 美術館で本物の浮世絵に出会う……2時間

第二次 「名所江戸百景」を見て話し合う …1時間

(5) 実際の授業の様子

①第一次 「美術館で本物の浮世絵に出会う」

黒部市美術館は、版画作品を中心に作品収集し展示していることで知られている。平成16年の春に開館10周年を記念し、「浮世絵の美」(4月9日～5月9日)が開催されており、2時間続きの鑑賞の時間を確保した。2学年全員で101人であることから、クラスごとに分け3回実施しすることになった。

美術館では、まず、学芸員の幸林理恵氏より、美術館のマナーや作品保存のためにライトが暗くなっているなどの説明を受け、初期のころの浮世絵から錦絵に移り変わっていくまでの歴史や、浮世絵の制作過程についての的確で分かりやすい説明を受けた。説明が一通り終わると、数人ずつのグループに分け、思い思いに自分が気に入った作品を簡単にスケッチさせ、気づいたことや作品についての感想もそこに加えさせた。

当日配布したワークシート「作品のどんなところがよかったか、自分なりに分析して書こう」から、生徒の記述を以下に載せる。

*上の鳥が、下の柿をねらっているようであり、止っている木もしなっていて動きが感じられる。背景の色が真ん中に向かって明るくなっていることも、より動きを出している。木の葉のかげまでつけてある細かさにも驚いた。(「柿に目白」小林清親作 横大判・錦絵)

*花びらや葉一枚一枚の色の濃さが変わっていて、影のつき方がよく分かった。他にも、風でゆれているように、わざとずらしている花もあった。下の方の葉を少しぼかしてあったのもよかった。

(「芥子に蝶」歌川貞虎作 横大判・錦絵)

*桜の色がすごく淡い色で、きれいだった。背景の上の方が微妙に青くなっていて、それが桜のピンクを引き立てていた。全体的に淡い色でまとまっていた、幻想的な感じになっていた。

（「桜図」歌川国芳作 横長絵判・錦絵）

今回の美術館鑑賞では、版画という制限の中で可能な限り駆使された工夫から、出来上がった錦絵への興味・関心が高まったことである。また、浮世絵の本物を見たり、説明を聞いたりしたことで当時の人々の暮らしへの関心も広がったようである。そのことは、「浮世絵について学んだことを書こう」という問いに対する次の記述からもうかがえる。

- * 絵の真ん中に線があって、何だろうと思っていたら、本のように折って見ていたと聞いてびっくりした。
 - * 歌麿の描いた美人画の中に、モデルの名前が隠されていて、歌麿はおもしろいことをする人だなあと思った。
 - * 風景画は実際にその場所に行っていなくても描いていることがわかった。版画はいろいろな人に見てもらうために発達したことも分かった。
 - * 教科書にのるようなすごい絵がここにあると思うとなんだか気分がよかった。
 - * 錦絵は何枚もの板を摺って、一つの作品を完成させることが分かってびっくりした。
 - * 浮世絵にはその人の喜びや悲しみ、人柄などが表現されていてすごいと思った。
 - * 昔は白黒だけだったが、少しずつ使う色が増えていき、錦絵というきれいな浮世絵版画になったことがよく分かった。
 - * 木目がうっすら写って入る作品や遠近感のある絵がぼくは気に入った。
- 作品が当時の人々に求められ、次第に美しく、つぎつぎに表現方法が工夫されていったことを多くの生徒が感じていたと言える。

②第二次 『名所江戸百景』を見て話し合う

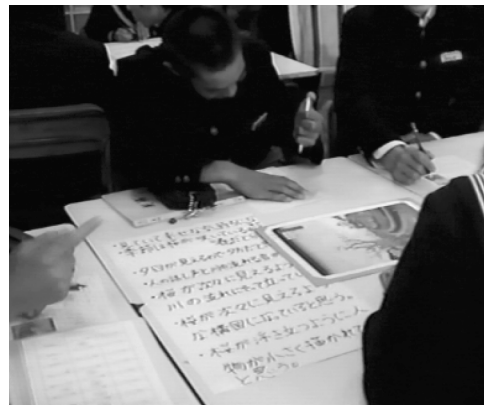
はじめに、プレゼンテーションソフトを使って広重の生い立ちや時代背景について説明を行った。その後、生徒に班ごとに作品²¹⁾の鑑賞をさせた。そこでは、班長が司会をし、班員から順に意見を求めていくようにし、出された意見についてどう思うか、班の意見として発表するかを話し合わせた。この時、話し合いが進めやすいように、鑑賞の視点を具体的に示した鑑賞用プリントを配布した。また黒板にも鑑賞の視点を示した。鑑賞の視点は次の通りである。

《鑑賞の視点》

- 作品を見て、どんな印象をもつだろう。

- 色や形の表し方にはどんな工夫があるだろう。
- どんな音がするだろう。
- 季節や時間はいつだろう。
- 構図にはどんな特徴があるだろう。
- 広重のねらいは何だろう。 などである。

生徒は、司会者を中心に話し合いを進め、思い思いに色の工夫や構図の工夫について考えたことや感じたことを出し合っていた。班の意見として取り上げた意見を模造紙に書き、発表の準備も平行して行っていた。広重の表現の工夫点を探ろうと1枚の作品に見入る姿や、自分が気づいたことを班員に伝えるために、適切な言葉を懸命に見つけながら話す姿も見られた。



班になって意見を出し合う生徒

それぞれの班から出た意見は、次の通りである。

「浅草金龍山」

- * 季節は冬で、雪が降っている。
- * 前にある大きな提灯が赤で、雪の白に一層映えている。
- * 大きな提灯が画面に立体感を出している。
- * 描かれたひとの傘が藁で編んである。
- * ねらいは、浅草の赤の提灯を目立たせたかったのだと思う

「玉川堤の花」

- * 桜が川に沿って、だんだん小さく描かれたくさん桜が見えるように描かれている。
- * 夕日が見えるので、夕方を描いていると思う。
- * 建物を入れることで、近代的な雰囲気を出している。
- * 着物などに赤を少し入れることで、派手な感じがでている。
- * 川の中央の色が淵より濃いのは川の深さを表している。
- * 人を小さく描いているのは、実際以上に桜を目立

たせたかったのだと思う。

- * ねらいは、桜が咲き、人が集まりにぎやかな様子を描きたかったのだと思う。



気づいたことを発表する生徒

「大はしあたけの夕立」

- * いつもはにぎわっている橋が、突然の雨に驚いて、いかにも急いでいる様子が伝わってくる。
 - * 雨の線が細い線と太い線があって、雨が激しく降っているのが分かる。
 - * 橋の下の川の色が濃い青なのは橋の影だと思う。
 - * ねらいは、突然の雨に憂鬱な気分の人々を描きたかったのだと思う。
- 「深川州崎十萬坪」
- * 鷹が空を覆いつくし、今にも絵から飛び出してくるようだ。
 - * 色が全体的に青っぽく寒々としている。
 - * 鷹の羽根一枚一枚がとてもリアルに描かれている。
 - * 鷹に対して山などがとても小さく描かれていることで、遠近感が極端に表現されている。
 - * 鷹の目から見た景色を表現したかったのだと思う。

「両国花火」

- * 季節は夏で、音がドーンと鳴り響いている。
- * 時間は夜で晴れている。
- * 花火を見てキレイと、言っているようだ。
- * 爆発一つ一つ描かれているところがすごい。
- * 花火によって明るくなっている様子が、花火や海を白っぽくすることで表現している。
- * 絵の中心に細い線が描かれていて、花火が右上にあることで、花火が打ち上げられた時の風景を描いていると思う。

「亀戸梅屋舗」

- 季節は春先で、朝だと思う。
- うぐいすのさえずる声が聞こえてくるようだ。
- 気温は低く、晴れている。
- 木の色はわざと本当の色でなく青色にしていると

ころがおもしろい。

- 空の色が赤いのは、梅の白を引き立たせるためだと思う。
- 梅の花に見とれている様子がよく表現されている。「王子装束糸の木大晦日の狐火」
- 大晦日の夜、小さな星が見えるほど快晴で、ちょっと恐い印象を絵から受けた。
- 狐の白を引き立たせるために、周囲を黒くしていると思う。
- 狐の自然な様子を表現するために、狐のポーズがみんな違っている。
- 何で左下に狐を描いたのだろと思って見ていたら、右上にも小さくたくさんの狐がえがかれていてその細かさに驚いた。

授業後の感想から、班での話し合いによる鑑賞は、一人一人の鑑賞の幅を広げるのに役立ったことが次の感想からうかがえる。また、作者がねらいをもって、構図を工夫していることに気づいていたようである。

- * 作品一つ一つに構図や色に工夫があって驚きました。
- * 広重の作品には、そこに暮らす人々の感情まで表現されていると感じました。
- * 他の人の発表を聞いていると、自分では気づかなかったことに気づいていてすごいなぁと思いました。でも、自分も一つの絵をじっと見ていたら、いろいろなことに気づけたのでよかったです。
- * 僕は、これまで全く浮世絵に興味はなかったけれど、今日の授業で浮世絵のよさがよく分かりました。
- * 勝手な印象かもしれないけど、浮世絵はおおざっぱ感じがしていたけど、広重の浮世絵は、とても細かいところまで表現してあり、びっくりしました。

授業の最後にジャポニスムについての説明をするために、プレゼンテーションソフトを使った。「どこがジャポニスム？」というクイズ形式を取り、浮世絵から影響を受けた3つの作品を紹介した。紹介した作品は、ルノワール作の「扇を持つ女」とドガ作の「舞台の袖の踊り子たち」、ロートレック作の「アンバサドールのアリスティド＝ブリュアン」である²²⁾。生徒は次のような感想を書いた。

- * 浮世絵の構図とそっくりな絵が外国にあるなんてびっくりした。

* 日本の絵が世界に認められるほどのすごさだったことをはじめて知った。

* 西洋の画家にまで影響を与えていることに、大変驚きました。

(6) 本授業の「日本美術」作品の果たした役割について

次に本授業で使用した作品について、第2章で示した実践事例に多く取り上げられる作品の特徴である4つの観点に、生徒の感想を、照らして考察を試みる。

①実物により近い鑑賞方法が可能な作品であること

第一次では実際に学校から徒歩10分の距離にある美術館に出かけて、本物の浮世絵作品を鑑賞している。そこでは、「木目がうっすら写って入る作品や遠近感のある絵がぼくは気に入った」という感想は、実物を目の前にしたことで、より詳しく知ることのできる事実である。

さらに、第二次では、「歌川広重」の精巧な複製作品を用いたことから「季節感がどの絵からも感じられた。ダミーの絵でも十分感じが出ているのに、本物の絵を見るとどれだけすごいだろう」という感想が得られたことから、実物に近い鑑賞方法が有効に働いてくることを示している。

②現代の視覚表現との比較が容易で親近感をいだかせるものであること

この点については、本授業実践においては、「玉川堤の花」について「桜が川に沿って、だんだん小さく描かれ」、「人を小さく描いているのは、実際以上に桜を目立たせたかった」等の感想を抱いていることから、現代の劇画等で通常用いられる遠近法がすでに用いられていたことに対する親近感を抱かせていることがうかがえる。

③デフォルメされたダイナミックな作風であること

例えば、この授業で用いた「深川州崎十万坪」では、この大胆な構図に、画面上部を覆い尽くした巨大な鷹に注目が集まっている。「今にも絵から飛び出してきそうだ」「鷹の羽根一枚一枚がとてもリアル」というように、デフォルメされたダイナミックな作風のよさに生徒は注目した。

④鑑賞対象の広がり期待できるものであること

本授業で紹介したルノアール等の作品は、ジャポニスムとのつながりということで、そのまま日本の浮世絵の影響を受けていることが分かりやすいものである。生徒は「西洋の画家にまで影響を与えてい

る」、「日本の絵が世界に認められる」と感想を述べている。外国の画家にまで影響を与え、ジャポニスムという言葉で受け入れられていたことに、驚いていたようだった。

4 「日本美術」の授業をつくるために

本論文では、敢えて「日本美術」とは、そもそどのような美術であるのかについて定義をしないで、論を進めてきた。本章では、それぞれの章での分析を振り返りながら、改めて美術教育において「日本美術」の授業をつくるために求められる要件について提案を行いたい。

(1) 第1章 学習指導要領にみる課題

戦後の学習指導要領における「日本美術」を取りあげた文章表現を次に再度整理してみる。昭和22年では小学校で、「日常使っている工芸品や学用品、絵画や彫刻などの実物または写真・複製品」、「古社寺」、「茶わん、盆、竹細工」。現在の中学校に当たる学年で、「絵巻物」「日本及び世界各国の美術品」、昭和26年（試案）では小学校において、「自分の郷土にどんな美術品や工芸品があるかについて調べたり、話し合ったりする」。中学校では「我が国の過去の美術作品」、昭和33年では小学校には記載がなく中学校で、「わが国および東洋諸国の絵画、彫刻、建築、工芸などの伝統的な作品」。昭和43年小学校で、「文化財」「墨絵、絵巻物」。昭和44年中学校「わが国および諸外国のすぐれた絵画、彫刻、工芸、建築」。昭和52年の中学校で、「時代、民族、風土などの相違による美術の良さや美しさ」。平成元年小学校で、「わが国や親しみのある美術作品など」「わが国及び諸外国の親しみのある美術作品など」、中学校で、「日本の文化遺産としての絵画や彫刻」「日本の文化遺産としてのデザインや工芸」である。

このように振り返ると、実は、本論文中において何回も使用している「日本美術」という表現は、戦後の学習指導要領の中では平成元年学習指導要領まで一度も登場していない。平成10年から「日本の美術」という表現が、中学校美術の中において使用されるようになった。しかし、この「日本の美術」がどのような美術作品を対象にしているのかについては、前出の昭和26年学習指導要領のみに示され、以来具体的に示されていないのである。

一方で、平成20年版学習指導要領においては、「美術を通しての国際理解」を行うことまで言及さ

れていることから、自国の文化について知ることが、他国の文化を尊重することまでに広がることを指摘している。自国の文化として美術表現を考えた場合、あらゆる時代の我が国の表現物を取り上げることに、それこそ、数限りない対象を扱うことにもなりかねない。学習指導要領において、明確な規定がなされないことは、やはり問題が残ると言えないだろうか。

(2) 第2章 専門雑誌に掲載された実践にみる課題

第2章のような過去の実践を一覧表にまとめることで、授業実践のレポートから、鑑賞の対象に取りあげやすい作品をその使用頻度から概観することができた。この章では、実践事例に取り上げる作品の特徴を洗い出してまとめたが、実際には、多くの教員がそれぞれの観点から、自分たちの授業で取り上げる作品を選択し授業を行っているのが現状である。

平成10年度以降、「日本美術」の鑑賞の授業が位置づけられた小学校の図画工作科第5学年と第6学年の年間の配当時数は50時間である。中学校の美術においては、中学1学年が45時間、第2及び第3学年が35時間である。この時数内で、他の表現の領域を行いつつ、鑑賞の授業を設定しなければならない。

したがって、このような状況で、どんな作品を児童生徒の前に提示し授業を行っていくのかが大きな問題になってくる。つまり、限られた授業時数のなかでどのような観点から作品を選択していくのか、検討されなければならないということである。小学校5年から中学校3年までに「日本美術」の鑑賞の授業を行ったとしても、それはせいぜい各学年1回ずつに留まるであろう。だからこそ、その選択によって、その作品から学び取れるものに、大きな違いがあることも忘れてはならないのである。

しかし、学習指導要領において、明確に「日本美術」の定義付けがなされていないことで、鑑賞の実践事例に見られる作品は、あらゆる分野に渡り、年鑑指導計画に位置づけることがなかなか難しい。

(3) 第3章 授業実践にみる課題

結論から先に述べると、本実践は、中学校の美術の授業としては、かなり完成度の高いものだったと言える。授業者自身が最初、「制作後150年以上たった『名所江戸百景』が、現在の中学生にどこまで共感するのだろうか。この題材では、中学2年

生の目にどのように受け入れられるのか見てみたい」と述べているが、授業中のレポートによると、生徒の学びは非常に深いことが分かる。

美術館で本物の浮世絵との出会いを始めに行い、さらにより本物に近い複製画を間近で見せたことより、鑑賞の対象として、西洋の美術作品に引けを取らないよさを十分に堪能させていると言えるだろう。最終的に、ジャポニスムについての説明までもプレゼンテーションで行うことで、江戸時代末期の浮世絵が欧米に受け入れられていく事実まで、生徒の素直な感想が引き出せていると考えられる。

この実践では、授業の終わりに一人の生徒が、次のように述べたと言う。「広重は見た風景をそのまま描いているのではなく、どの絵にも感情を入れていたと感じた。また、季節感がどの絵からも感じられた。ダミーの絵でも十分感じが出ているのに、本物の絵を見るとどれだけすごいだろうと思った。」

このように、鑑賞の対象を「日本美術」に限ったとしても、現代の生徒には、素直に受け入れることが可能であり、この授業の目標を達成することは十分可能であることが分かる。

ところが、問題は、本実践は、その年度だけの特別な授業であったという事実である。前項で述べたように、年間指導計画に位置づけて次年度もその翌年も実施していないということである。黒部市美術館にしても、あの展覧会を毎年同じ時期に行っているわけではない。毎年の都合に頼っていると、年間指導計画にきちんと鑑賞の対象作品を取り上げることも不可能になってくる。

さらに第二次の展開で、重要な提示物となった広重の複製版画も、この授業用に借り受けた作品であり、持ち主と授業者の信頼関係があってこそ可能な準備物と言える。

したがって、いくら優れた実践でも、毎年きちんと年間指導計画に位置づけられて行うことのできるものでなければ、恒常的に「日本美術」を教えることにはならないのである。

(4) 今後の研究課題

前述したように実践事例の分析から、平安時代から江戸時代までの間に、「日本美術」の作品が限定されていることが分かる。しかし、昭和26年版学習指導要領に美術作品の鑑賞資料として目次に掲載された作品の中には明治初年の洋画家として活躍した黒田清輝、日本画科の狩野芳崖なども紹介されて

いる。また、「日本美術の歴史」²³⁾を表した辻惟雄は縄文土器から、大友克洋の「AKIRA」、宮崎駿の「千と千尋の神隠し」まで取り上げている。

本論文のタイトルに用いた「日本美術」の定義は、筆者の過去論文²⁴⁾においても、美術教育の分野において極めて曖昧であることを指摘し、「日本美術」の再定義の必要性について述べてきた。

一般的に、「日本美術」の鑑賞の内容を含んだ文献も書名に「日本美術」という単語が含まれる解説書や評論の類も、何をもって「日本美術」とするのかという定義付けがされないままに論を進めているものが数多く出版されている²⁵⁾。

ここで、これまでの考察を基に次のような提案を行いたい。

①「日本美術」を過去の実践事例をもとに定義していくことの必要性

まず、第3章で整理したように過去の授業実践に、取りあげられた作品を綿密に分析することで、その作品の持つ美術教育の資料としての価値を整理する。授業で用いる作品は、その授業を行う授業者に、その作品を選定する理由があるからである。今回の検討では10年間分の授業実践の分析しか取り組んでいないが、せめて過去20年間分のデータ整理を行い、その結果から、美術教育の鑑賞の授業で取り上げる「日本美術」の作品として定義するのである。その上で、小学校5年から中学校3年まで、発達段階を考慮しながら作品を選んでいくことが求められるだろう。

その上でさらに以下の提案を行いたい。

②日本全国、どこでも授業で簡単に取りあげられるようにその複製等の資料が簡単に入手できる作品の選定

もちろん、可能であれば本物の作品を見せることが大切である。しかし、前述したようにこの点については、歩いて行ける距離に常設の美術館がある以外は実現が難しい。また、教科書に掲載されている作品を活用することが前提になるが、教科書も数年で改訂がなされ、常に同じ作品が掲載される訳ではない。したがって、恒常的に鑑賞資料となり得る基本的な作品のリストアップが必要ではなかろうか。

③指導法に差が出にくい授業実践の手引き作成の必要性

経験の少ない若い授業者や非常勤等で指導する授業者にも、「日本美術」の鑑賞の授業が普通に行え

るようになってこそ、日本の伝統文化を伝えることができると言えよう。したがって、基本的な授業例を示した手引き等の作成が求められる。

おわりに

なぜ、「日本美術」を義務教育における図画工作科や美術科で取りあげていく必要があるのか。この問いに常に向かっていく必要があるだろう。筆者は、自身の小学校及び中学校時代には、昭和33年版学習指導要領及び46年版学習指導要領のもとに編集された図画工作と美術の教科書で学んだ。第2章で述べられているようにこの期間は、それほど、積極的に「日本美術」が授業で取り扱われた時期ではない。そのためかどうか、西洋の美術にあこがれ、「日本美術」はなぜか黴臭い、古くさいものという感想を抱き続けてきた。

平成20年8月に開催されたInSEA世界大会（国際美術教育会議大阪大会）では「Mind心, Mediaメディア, Heritage伝統」が大会テーマに掲げられていた。その学会では、自国の伝統美術の教育をどのように継承していくか、または、どのようにそれを美術教育の中に位置づけていくかについての発表が多く見られた。また、平成22年6月にフィンランドで開かれたInSEAヨーロッパ大会では、スウェーデンやノルウェーや地元フィンランドの参加者から、スカンジナビア半島の先住民であるサーミの人々の伝統美術を生かした美術教育の在り方についての発表があった。

さらに、このような世界大会に参加すると、海外の研究者との会話において、日本の過去や現代の美術表現についての話題が出され、嫌でも日本の美術表現について答えなければならないのが現実である。彼の地の研究者の中には、北斎等の浮世絵はもちろん、現代のマンガを「MANGA」として、アニメーションは「ANIME」として認識し、日本の美術文化の現況にも詳しい方が増えている。

「日本美術」を取り上げること。これは、自国の文化の教育である。自国の文化としての「美術」を学ばせる。このことを、今一度考えて直してみなければならないだろう。

「日本美術」の定義を曖昧なままにしたままで、授業者がそれを自由に解釈して、勝手に授業を行っている状態が続くということは、問題がある。指導をすることが、一方的に義務づけられたとしても、

時数の確保や、提示する作品をなど、解決されるべき問題は多い。今回の検討をもとに、今後もさらに研究を進め、学校教育の現場において、いかなる方法が望ましいのかについて、少しでも具体的な提案ができるようにしたい。

本論文の執筆分担については、「はじめに」と、「第4章」、「おわりに」を隅が担当し、「第1章」および「第2章」を谷川、「第3章」を本波がそれぞれ担当し、全体のとりまとめを隅が行った²⁶⁾。

註

- 1) 日本児童美術研究会,「図画工作6」,1991年,日本文教出版, p32
- 2) 隅敦「美術教育における“日本美術”の位置」に関する考察」富山大学人間発達科学部紀要第3巻第2号,2009年, pp.31-46
- 3) 講義内容は,全15回の講義のうち,「鑑賞の授業の課題」と題する2回構成の講義において,最初の回に鼓が日本美術の鑑賞の授業で取りあげて欲しいと考える作家の作品のスライドを見せ,その作品の解説を加える。その翌週に隅が過去の学習指導要領における日本美術の扱いや,授業展開について紹介している。
- 4) 2009年7月29日実施,「美術科教育の学力と評価について考える」鼓みどり,上山輝と共同で指導。
- 5) 学習指導要領データベース作成委員会(国立教育政策研究所内)で作成された「過去の学習指導要領」<http://www.nicer.go.jp/guideline/old/> 2010年5月15日取得
- 6) 文部省「図画工作科鑑賞資料」
<http://www.nicer.go.jp/guideline/old/s26jhc/chap2.htm> 2010年5月15日取得
- 7) 上野芳太郎「小学校教育課程の改善について」『初等教育資料 臨時増刊102号』1958年p.258
- 8) 同上 p.256
- 9) 同上
- 10) 同上
- 11) 教育課程審議会「小学校の教育課程の改善について(答申)」『初等教育資料11月号』1967年 pp.4-11
- 12) 教育課程審議会「小学校,中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について(答申)」『初等教育資料 2月号 No.345』1977年 pp.62-83

13) 樋口敏生「図画工作」『初等教育資料 臨時増刊 7月号 No.357』1977年 p.164

14) 西野範夫「図画工作科の改善の基本的な考え方とその内容」『初等教育資料 6月号 No.533』1989年 p.57

15) 同上

16) 平成10年6月30日 中央教育審議会答申「新しい時代を拓く心を育てるために」一次世代を育てる心を失う危機—第4章 心を育てる場として学校を見直そう

(2) 小学校以降の学校教育の役割を見直そう

i) 我が国の文化と伝統の価値について理解を深め,未来を拓く心を育てよう

(a) 我が国や郷土の文化・伝統の価値に目を開かせよう

我が国が活力ある文化国家として発展していくためには,国民一人一人が,国や郷土の伝統・文化に対する理解と愛情,またそれらを尊重する心を持つことが大切である。21世紀において,国際化が進む中で,日本人としての自覚をもって主体的に生き,未来を拓いていく上でも,自らのよって立つ国や郷土の伝統・文化の価値を子どもたちが深く理解することは極めて重要である。また,物質的には豊かになった今日,人々自身も,心の豊かさをむしろ希求するようになっており,国や郷土の伝統・文化を継承し発展させようとする機運が社会の中で確実に高まってきている。

このため,学校において,国や郷土の伝統・文化や歴史に対する理解を深め,尊重し,さらに継承・発展させる態度の育成を図るという視点に立って,各教科や道徳,特別活動での取組を進めていくことが必要である。

学校での指導方法については,国や郷土の遺跡や文化遺産,伝統工芸や芸能などに直接触れ,親しむような体験学習を積極的に取り入れるべきである。その際,学校ですべての教育を担おうとするのではなく,こうした分野に造詣の深い地域の人材の協力を得るなど,地域の教育力を大いに活用すべきである。

なお,教員自身が我が国や郷土の伝統・文化に対する理解と愛情を持っていなければ,それらを子どもたちにはぐくむことはできない。教員が,我が国や郷土の伝統・文化に親しむ学習に積極的

に参加できるよう、研修の機会等で配慮することが必要である。

は幸いであった。

17)「教育美術」教育美術振興会「美育文化」美育文化協会

(2010年 5月20日受付)

(2010年 7月14日受理)

18) 平成16年10月13日、富山県中学校教育研究会美術部会の研究大会で実施した。当時、富山県中学校教育研究会美術部会では、3年計画で鑑賞の授業実践の研究を行っていた。実施校は、黒部市立高志野中学校の2年生の生徒であった。

19) 高橋克彦「江戸の人々と浮世絵」光村図書出版、2005年、pp250-259

20) 大久保純一「広重と浮世絵風景画」東京大学出版会、2007年、p159

21) 本時で用いた安藤広重の複製作品は、現在、本大学芸術文化学部の教授後藤敏伸氏の所蔵のものを借用したものである

22) ルノワール作の「扇を持つ女」は、喜多川歌麿作「高島おひさ」から、ドガ作の「舞台の袖の踊り子たち」は、広重作「『名所江戸百景』鎧の渡し小網町」から、ロートレック作の「アンバサドールのアリスティド＝ブリュアン」は、歌川豊国作「三世市川高麗蔵の佐々木巖流」からの影響を受けていると見られる。

23) 辻惟雄「日本美術の歴史」東京大学出版会、2005年

24) 拙稿 前出2)

25) 田中日佐夫「日本美術の演出者」駸々堂出版、1981年、源豊宗「日本美術の流れ」思索社、1976年、角川書店編「図説 日本美術」角川書店、1965年 等

26) 本論文は、本年度富山大学教育学研究科美術教育専修に在籍する大学院生二人と隅の共同研究の形を取り執筆をとった。谷川瞳は、学部在学中から、「日本美術」の鑑賞の授業に関心を抱き、研究を行い卒業論文で「図画工作科における『日本美術』の扱いについての一考察」を提出している。本波葉子は、20年間公立中学校において美術教師を務めており、本年度本教育学研究科に現職で派遣されているところである。氏が平成16年度に勤務していた学校で行った中学校教育研究会での提案授業が、安藤広重の浮世絵を扱った鑑賞の授業であったことから、その際の指導案及び生徒の提出した感想文及び授業記録のビデオテープ等を起こすことで、資料を整えることができたこと